

## 論文審査の結果の要旨

|         |                         |    |      |
|---------|-------------------------|----|------|
| 報告番号    | 甲第991号                  | 氏名 | 安出卓司 |
| 論文審査担当者 | 主査 樋口京一<br>副査 天野直二・角谷眞澄 |    |      |

### (論文審査の結果の要旨)

脳アミロイドアンギオパチー関連再発性脳出血の予防に対する副腎皮質ステロイド治療の長期効果を明らかにすることを目的とした。対象は脳アミロイドアンギオパチーのボストン診断基準において、G3 から G4 と診断された男性1名と女性2名の3症例である。方法は脳のA $\beta$ アミロイド沈着を評価するためにBF277アミロイドPETを用いて検査し、全3例の脳にアミロイドの沈着を認めた。臨床経過は、G3と診断された66歳の男性例(症例1)では、プレドニゾロン(PSL)50mg/日で開始され、6か月間で漸減中止としたが、その6か月後には脳出血が再発した。このため、同様にステロイド治療が再開された。G3と診断された69歳の女性例(症例2)では、脳出血再発時にデキサメサゾン(DEX)16mg/日で開始し、一週間後にはPSL30mg/日へ変更・漸減し8mg/日で維持された。G4と診断された75歳の女性例(症例3)では、PSL30mg/日で開始され、その後漸減しPSL8mg/日で維持された。また、観察期間内では、臨床像およびMRIのT2\*画像での微小出血面積を画像解析で評価した。2つの症例ではステロイド治療の前後で、BF277アミロイドPETによって後頭葉におけるSUV(standardized uptake value)の評価を行った。その結果、症例1では副腎皮質ステロイド治療の開始20ヶ月後に左前頭葉に小再出血を発症し、ステロイドパルス療法を施行した。その後33か月間は再出血を認めていない。アミロイドPETでのSUVは14ヶ月間で2.0から2.2へ増加し、微小出血面積も27ヶ月間で410.2mm<sup>2</sup>から445.5mm<sup>2</sup>へ増加していた。症例2では副腎皮質ステロイド治療の開始29ヶ月後に多発性の小再出血を発症し、ステロイド投与量が一時的に増量された。その後の17ヶ月間は再出血を認めていない。アミロイドPETでのSUVは18ヶ月間で1.5から1.4へ減少したが、微小出血面積は27ヶ月間で512.5mm<sup>2</sup>から560.8mm<sup>2</sup>へ増加していた。症例3では副腎皮質ステロイド治療を開始して22ヶ月間再出血を認めておらず、微小出血面積は13ヶ月間で152.5mm<sup>2</sup>から154.1mm<sup>2</sup>へ微増していた。以上より、脳アミロイドアンギオパチー関連再発性脳出血に対する副腎皮質ステロイド治療の長期効果は、臨床的には有効である印象だが、検査データから有効であるとの結論を導き出すことはできなかった。本邦で開発されたBF277PETは脳アミロイドアンギオパチー関連のアミロイド沈着の可視化に有用であった。

以上の結果より、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。